『明暗』試論

――『明暗』と則天去私――

釘宮久男

一、「私」

『明暗』百八十五に、次のような個所がある。

津田に再会した、津田のかつての愛人清子は、「単純」「淡白」に語る、自然の成行きとしてお互いに遠々しくなったと。津田はそうした清子に不満を覚える。

〈「何(ど)うしてそれが不満なのか」

津田は面と向って此質問をする丈の勇気がなかった。関が現に彼女の夫である以上、彼は敬意をもって彼女の此態度を認めねばならなかった。けれどもそれは表通りの沙汰であった。偶然往来を通る他人のする批判に過ぎなかった。裏には別な見方があった。其所には無関心な通り掛りの人と違った自分というものが頑張っていた。そうして其自分に「私」という名を命(つ)けることの出来なかった津田は、飽くまでもそれを「特殊な人」と呼ぼうとした。彼の所謂特殊な人とは即ち素人に対する黒人であった。無知者に対する専門家であった。だから通り一遍のものよりも口を利(き)く権利を有(も)っているとしか、彼には思えなかった。〉

右の文中の「私」が、『明暗』中、「則天去私」の「私」と同義と考えてよいと考えられる唯一つの用例である。

一体、『明暗』世界の語り手はかなり饒舌である。随処に、登場人物の人間性、人格性等について注釈、説明を加える。そこには、『明暗』世界造形にあたっての作者の特異な姿勢が読み取れる。その問題については後から自ずと触れねばならないから今は省く。しかし、それにしても、この個所のように、作者に独自的な用語を持ちこんでいる例は、あまりない。(ほかには、「天」と「自然」の用語例を指摘できる)。しかも又、右の個所における「其自分に『私』という名を命(つ)けることの出来なかった」は、読者にとっては、いわば無用の贅言ではなかろうか。それを除去して「……自分というものが頑張っていた。津田は飽くまでもそれを『特殊な人』と呼ぼうとした」としても、文の姿勢に多少のくずれは生ずるが、文意は十分に通じ得る。しかも作者が「私」という語を特に持ち出して「其自分に『私』という名を命(つ)けることの出来なかった津田」と津田を規定してみせているのは、作者が、『明暗』の主人公津田を(今は一応、津田だけに限って言っておくが)、照射する光源において、右の文でいうところの「自分というもの」を「私」という独自な語で捉えるというような一つの人生観、人間観を用意しているということの意識的な表明と言ってよいのではなかろうか。

そのような、光源に用意され、作品に瞬発的ながら端的な露呈を見せた作者の人生観、人間観を、『明暗』執筆当時の漱石にかかわらせていく時、答えとしては、まっすぐ、例の「則天去私」が出て来るであろう。

そこから単簡に、しかし一応『明暗』世界が若い世代達の生態に焦点を合わせている世界であることを顧慮しつつ、逆に『明暗』の方に糸を引っ張れば、『明暗』は、人生者として「則天去私」を志向する漱石が、そのようなものへの回旋なしには人間は、「我」と「我」の角突き合いという生活（又は人生）における欠落状況からの回復はあり得まいという訴えをその底部にひそませて、特に、若い世代へ向けて書かれた作品であるという立言が可能となる。

本稿において、私は、そのような『明暗』のとらえ方を、主として『明暗』に即して検証してみたいのである。

「則天去私」と『明暗』のつながりを、『明暗』の近代的文学作品としての見事な達成度ということを意識に置いて考察すれば、

〈そこで、「則天去私」を文学創作上の視点であると断定したら…
…これにはすこしもむりがないばかりでなく、対立していた「則天去私」の解釈が統一的に把握できるのである。〉（『漱石の道程』高木文雄）

というような答えは比較的容易に紡ぎ出し得る。漱石の小宮豊隆あての次の書簡は、そのための有力な証左たり得るのである。

〈却説あの小説にはちっとも私はありません。僕の無私という意味は六づかしいものでも何でもありません。たゞ態度に無理がないのです。だから好い小説はみんな無私です。〉（大正五年十一月六日）

しかし、「則天去私」を、そのように「文学創作上の視点」と限ってしまうことは、漱石の、文学創作自体への一つの特異な、根源的な姿勢を切り捨てることではなかろうか。

漱石は、いわば、人生において何者かであらねばならないという決意もしくは願いを生涯を貫いて持っていた。それは、文学にスタートした時期においては、「一人の朋なきを憂へず。只卑しきを恥づ　妻子なきを憂へず只陋なるを恥づ　父母兄弟なきを憂へず只曲れるを恥づ」という烈しい、生形成の倫理的意向として書きつけられ（明治三十八・九年『断片』）、『道草』の健三に投影されては「彼は生きてゐるうちに、何かを為終せる、又仕終せなければならないと考へる男であった」という形で表白される。四十三歳という年齢においても、『断片』に、「生活の為の生活。善ナク美ナク真ナク壮ナシ」と書きつける。『明暗』執筆期においても「私がもっと偉ければ宅へくる若い人ももっと偉くなる筈だと考へると」（富沢敬道あて書簡）と言ってしまうような〝人生において何者かであらねばならぬ〟という志向に生きていたのである。その志向は、『道草』からの引用にも、富沢あて書簡にもあらわれているように、個としての人生成就がありさえすればよいというように閉鎖しているのではなかった。それは、いわば公的な性格をも兼有していたのである。前代を否定し、いわゆる文明開化の当代、個々がばらばらになって紛糾している二十世紀を否定する漱石が、自らに、にないこんだのは、そういう状況下においての新しい「世道人心」の樹立である。それは個々がばらばらになっているが故に、個々の人心としてまず樹立されていかねばならなかった。個々においてということであれば、それは又、漱石自身の、個の人間的状況において〝人心ヲ正ス〟営みが行なわれねばならぬ。『吾輩は猫である』『坊っちゃん』から『野分』の初期作品から『行人』『こころ』『道草』への後期作品への文学的歩みは右のことのさながらの投影である。神なき漱石にとって、それがどんな地獄を呼びこむことであったかは、『行人』『道草』にまざまざと描き出されている。そうした漱石にとって、文学は

〈要スルニ皆 live スベキ tendency ヨリ出デテ how to live

ノ問題ヲ考ヘテノ事デアルカラシテ皆　practical　interest
ヲ有スル家業デアル其ウチデモ芸術家ハ以上ノ効果ガアルカラシテ
尤モ世道人心ニ関係ノ深イモノデアル〉（『断片』明治四十年頃）

大正四年という時点においてさえ、

〈小説、ノ尤モ有義ナル役目ノ一ツトシテ……×吾人ハ effect ノ
為ニ然スルノミナラズ、人道ノ為ニ然セザルベカラズ〉

という自覚又は誇負において営まれるべき「生きているうちに為終せる、又仕終せなければならぬ」「何事か」であったのである。それを、もっと高い形で言えば、

〈倫理的にして始めて芸術的なり。真に芸術的なるものは必ず倫理的なり〉（日記　大正五年五月十六日）

こうした漱石を、統合的に考えていくならば、『明暗』期に漱石が思い当てているところの、人生または人間としての成就の様態である則天去私は、『明暗』に、高木氏の説くところよりもっと深く関わって来ているのではあるまいか。『明暗』は則天去私的な文学創作姿勢で書かれていることは勿論であるが。

二、自　然

「私」に対照させて『明暗』における「天」を次に検討するのが順路であろうが、「天」と『明暗』とのかかわりを明らかにする手順として、しばらく次に『明暗』における「自然」のあらわれ方を検してみたい。

かつての愛人清子に逢いに温泉場に出かける津田は、その前夜、友人小林から次のように宣告される。

〈小林に啓発されるよりも事実其物に戒飭される方が、遥かに覿面で切実で可いだろう〉

津田が「事実による戒飭」をどう受け入れ得るかは別として、『明暗』は諸処で、小林の言う「事実による戒飭」的事実が温泉場の津田を見舞うだろうということを、予告し、指向して見せている。小林が津田に、右の言を浴びせる場面でも、作者は、

〈是で幾分か溜飲が下りたような気のした津田には、相手の口から出た最後の言葉など考える余地はなかった。……一人になった彼は、電車の中ですぐ温泉場の様子などを描き始めた〉

と、小林の言葉が、温泉場での津田に生きてくるだろうことを暗指してみせている。

そもそも『明暗』自体が、「事実による戒飭」と小林の言った如き異変的事実がわが身の上に起こることの暗い予感に津田をつき当らせることから、その小説的展開は開始されている。

〈此肉体はいつ何時どんな変に会わないとも限らない。それどころか、今現に何んな変が起りつつあるかも知れない。そうして自分は全く知らずにいる。恐しい事だ。

「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう変るか分らない。そうして其変る所を己は見たのだ」

「何うして彼の女は彼所へ嫁に行ったのだろう。それは自分で行こうと思ったからに行ったに違ない。然し何うしても彼所へ嫁に行く筈はなかったのに。そうして此己は又何うして彼の女と結婚したのだろう。それも己が貰おうと思ったからこそ結婚が成立したに違ない。然し己は未だ嘗て彼の女を貰おうとは思っていなかったのに。偶然？　ポアンカレーの所謂複雑の極地？何だか解らない。」〉

温泉場に向かう津田に、作者はこれと同じような、そしてもっと烈しい

恐怖に脅えさせている。

〈「彼女に会うのは何の為だろう。……わざわざ東京から後を跟けて来た彼女、は何んな影響を彼の上に起すのだろう」

冷たい山間の空気と、其山を神秘的に黒くぼかす夜の色と、其夜の色の中に自分の存在を呑み尽された津田とが一度に重なり合った時、彼は思わず恐れた。ぞっとした。

〈すると幾点の電灯がすぐ津田の眸に映ったので彼は忽ちもう来たなと思った。……。

「運命の宿火だ。それを目標に辿りつくより外に途がない」

詩に乏しい彼は固より斯んな言葉を口にする事を知らなかった。けれども斯う形容して然るべき気分はあった。〉

小林が彼の「啓発」を傲然と拒否した津田を投げ返した「事実」の世界とは、事物が事物自体の法則性 — 津田の「偶然？ポアンカレーの所謂複雑の極地？何だか分らない」と言う意味では、無法則な法則性において、その世界を展開する世界である。そうした展開様相は、世界の〝自然〟性と呼んでいいだろう。世界を〝自然〟と呼ぶ時、人はその〝自然〟性において世界をとらえているのである。

人間は、その〝自然〟の中に投入された存在 — 〝もの〟でもある。その次元に閉鎖する限りにおいて人間はbeast的である。漱石は、その思い当てを明治三十七、八年断片に〝I see in myself, in our neighbours, in professors and statesmen nothing but beasts — bestiality incarnate〟と書きつけ、『道草』で健三に

〈「姉はただ露骨な丈だ。教育の皮を剝けば己だって大して変りないんだ」

平生の彼は教育の力を信じ過ぎていた。今の彼は教育の力で何うする事も出来ない野性的な自分の存在を明かに認めた。斯く事実の上に於て突然人間を平等に視た彼は……〉

と自覚させている。

beast的な、ほとんど事物的存在〝もの〟として〝自然〟の中に存在する人間を支配するのは、〝自然〟の無法則的法則である。人間において、もっとも〝自然〟的である肉体はそれ故「いつ何時どんな変に会わないとも限らない」。 山川草木的自然も、人間の、それに対する願いや志向とは無関係に、それ自体の在り方において人間を囲繞する。それは時に人間に優情を示すかの如く、『明暗』において、津田にも次のように立ち現われもするだろう、

〈星月夜の光に映る物凄い影から判断すると古松らしい其木と、突然一方に聞え出した奔湍の音とが、久しく都会を出なかった津田の心に不時の一転化を与えた。彼は久しく忘れた記憶を思い出したような気分になった。

「ああ世の中には、斯んなものが存在していたのだっけ、何うして今迄それを忘れていたのだろう」

不幸にして此述懐は孤立の儘消滅する事を許さなかった。津田の頭にはすぐ是から会いに行く清子の姿が描き出された。〉

しかし、〝自然〟は又、冷然として人間を踏みつぶしもするだろう。先に引いたように、「其夜の色の中に自分の存在を呑み尽くされた津田とが一度に重なり合った時、彼は思わず恐れた。ぞっとした」。

単なる生活者としての人間は、その実態においては〝beast〟、「野性」— 自然の中の一微片でしかない。「人間の生死」も「自己が

自然になり済ました気分で観察したら、ただ至当の成行」（『思ひ出す事など』）にすぎぬ。自然には、自然自体の「至当な成行」があるばかりである。

従って、人間が、〃自然〃的人間として〃我〃的姿勢で〃自―他〃の場を生活の中に現象させていく時、〃自然〃は〃自然〃自体の法則性においてしかそれを展開させない。『明暗』の次の個所で漱石は明確に、そうした、生活の展開における〃自然〃を呈示している。

＜彼女は前後の関係から思慮分別の許す限り、全身を挙げて其所へ拘泥らねばならなかった。それが彼女の自然であった。然し不幸なことに自然全体は彼女よりも大きかった。彼女の遥か上にも続いていた。公平な光を放って、可憐な彼女を殺そうとしてさえ憚らなかった。

彼女が一口拘泥わるたびに、津田は一足彼女から退ぞいた。二口拘泥れば二足退いた。拘泥わるごとに津田と彼女の距離はだんだん増して行った。大きな自然は、彼女の小さい自然から出た行為を遠慮なく蹂躙した。＞

＜不幸な彼女は此矛盾に気がつかずに邁進した。それでとうとう破裂した。破裂した後で彼女は漸く悔いた。仕合せな事に自然は思ったより残酷でなかった。彼女は自分の弱点を浚け出すと共に一種の報酬を得た。今迄何んなに勝ち誇っても物足りた例のなかった夫の様子が少し変った。彼は明らかに妥協という字を使った。其裏に彼女の根限り掘り返そうと力めた秘密の潜在する事を暗に自白した。＞

＜けれども自然は思ったより頑愚なであった。二人は是丈で別れる事が出来なかった。妙な機みから一旦収まりかけた風波がもう少しで盛り返されそうになった。＞

＜話が存外楽に進行したので、程なく第二の妥協が成立した。…うそ寒の宵に、若い夫婦の間に起った波瀾の消長は、これで漸く尽きた。二人は一先ず別れた＞

第一、第二と妥協を重ねて「一先ず」和合に到達した二人は、一先ずの和合を破って、又他日、同じような「波瀾の消長」を再演するだろう。不毛な繰り返しである。その果には、生活に馴致されて、流れに磨滅されて角のとれた石ころのように、夫婦という人倫関係のそれぞれの一極として、そこに置かれているにすぎなくなってしまうだろう。自然現象的に生きる時、自然現象と同じく、そこには風化しかない。津田の叔母の姿に、漱石は、そうした風化の姿を呈示している。

＜四十の上をもう三つか四つ越した此叔母の態度には、殆ど愛想というものがなかった。其代り時と場合によると世間並の遠慮を超越した自然が出た。其中には殆ど性の感じを離れた自然さえあった。＞

この叔母の眼には、結婚という問題さえ

＜「是ばかりは妙なものでね。全く見ず知らずのものが、一所になったところで、屹度不縁になるとは限らないしね、又いくら此人ならばと思い込んで出来た夫婦でも、末始終和合するとは限らないんだから」

叔母の見て来た世の中を正直に纏めると斯うなるより外に仕方がなかった。＞

叔母は生活をすべて「事実」に還元させてしまっている。人生とは、ほとんど自然現象的であるのだ。「小さな自然」は「大きな自然」から翻弄され、時に噛みつぶされる。

漱石が明治三十七・八年頃、己れの中に beast を見た時、それは漱石にとって自己破産的な自覚でこそあったろう。『道草』で、健三に

己れの中に、姉と同じ「野性」を見出させた時も同じ事であった筈だ。事実、健三に次のような反省を漱石は別の場所でさせている。

＜「彼の一生は斯うして老いた。

島田の一生を煎じ詰めたような一句を眼の前に味わった健三は、自分は果して何うして老ゆるだろうかと考えた。彼は神という言葉が嫌いであった。然し其時の彼の心にはたしかに神という言葉が出た。そうして若し其神の眼で自分の一生を通して見たならば、此強慾な老人の一生と大して変りがないかも知れぬという気が強くした。＞

それは、漱石が自分自身の実人生に思いあてた状況でもあった。

＜自活の計に追われる動物として、生を営む一点から見た人間は、正に此相撲の如く苦しいものである。（中略）かく単に自活自営の立場に立って見渡した世の中は悉く敵である。自然は公平で冷酷な敵である。社会は不正で人情のある敵である。もし彼対我の観を引延ばすならば、朋友もある意味に於て敵であるし、妻子もある意味に於て敵である。そう思う自分さえ日に何度となく自分の敵となりつつある。疲れても已め得ぬ戦いを持続しながら、茫然として独り其間に老ゆるものは、見惨（みじめ）と評するより外に評しようがない。＞

（『思い出す事など』）

こうした自己と自己の人生の破産状況から漱石は救われねばならぬ。救われは、〝生〟にどのような軸を見出すことに於いて可能であるかの啓示は、修繕寺大患体験として来る。

＜四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、左（さ）したる過去を持たぬ男に、忙しい世が是程の手間と時間と親切を掛けてくれようとは夢にも待ち設けなかった余は、病に生き還ると共に、心に生き還った。余は病に謝した。又余のために是程の手間と時間と親切を惜しまざる人々に謝した。そうして願わくは、善良な人間になりたいと考えた。そうして此幸福な考えをわれに打壊す者を、永久の敵とすべく心に誓った＞（同前）

『明暗』世界の構想に、右のように「公平にして冷酷」な「自然」を一つの軸として設定している漱石は、『思い出す事など』に書きつけられた〝救われ〟の理念を『明暗』に何らかの形で投影させていないだろうか。

三、親切・好意・同情の次元

津田の妹お秀は、津田が困っている金を、純粋に「妹の親切」として、自分の手で調えて津田を訪れる。しかし、お秀はそこで津田からの嘲罵さえ浴び、お延には冷淡さしかなかった。親切を親切として受け入れ得ぬ二人に、お秀は敵意を超えた思いに燃えて、二人を論告する。

＜「あなた方お二人は御自分達の事より外に何も考えていらっしゃらない」「自分達さえ可（よ）ければ、いくら他（ひと）が困ろうが迷惑しようが丸で余所を向いて取り合わずにいられる方だ」「自分丈の事しか考えられないあなた方は、人間として他（ひと）の親切に応ずる資格を失なっていらっしゃる……。つまり他（ひと）の好意に感謝する事の出来ない人間に切り下げられている……。あなた方はそれで沢山だと思っていらっしゃるかも知れません。何処にも不足はないと考えていらっしゃるかも知れません。然し私から見ると、それはあなた方自身にとって飛んでもない不幸になるのです。人間らしく嬉しがる能力を天から奪われたと同様に見えるのです。兄さん、あなたは私の出した此お金は欲しいと仰（おっし）ゃるのでしょう。然し私の此お金を出す親切は不用だと仰ゃるのでしょう。私から見れば、それが丸で逆なのです。

人間として丸で逆なのです。だから大変不幸なのです。そうして兄さんはその不幸に気が付いていらっしゃらないのです。（中略）嫂さんも逆です。嫂さんは妹の実意を素直に受けるために感じられる好い気持が、今のお得意よりも何層倍人間として愉快だか丸で御存知ない方なのです」〉

お秀のこの糾弾は、二人の人間的欠落を的確に衝いている。津田自身にも作者は、お秀の言の正当さを認めさせている。

〈「お秀もう解ったよ」と津田が漸く云い出した。彼の頭に妹のいう意味は判然入った。〉

作者の視がお秀の視に重っている。作者はここで、お秀に対して「我」的姿勢に閉鎖している二人を活写しつつ、そうした我的姿勢は、「万法帰一」であって、彼らの生活のあらゆる位相に顕現するものであり、約めて言えば、彼等の人生態度の中軸であるが故に、人間における、人間としての不幸にしか彼等は生きられないことを言おうとしている。換言すれば、「我」的姿勢に閉鎖された津田とお延 ― 人間の中の「小さな自然」を己れの生姿勢として、「大きな自然」という軸が規定する次元にしか生きようとしない彼らに対して、人生には、別のあるものを軸とするところの、他者に親切を差し出し、「他の親切に応じ」「他の厚意に感謝する」次元、人間としてそのようにあることの嬉しさに満される次元の存在が、対比的に読者に向かって提示されている。〝読者に〟と言ったのは、お秀の論告は、津田やお延に受け入れられるはずのないように、この場面の構成が、もともと作者によって仕組まれているからである。お秀は小姑的な我的姿勢でしかお延に対向していなかったし、その姿勢をよじって津田にも対向する。津田とお延は、「夫婦相せめぐ外其侮りを防ぐ」（大正五年『断片』）としての我的姿勢でこれに対抗している。お秀の論告は、彼女の辞去後の二人の

〈「お秀さんは、まさか基督教じゃないでしょうね」

「一体何でもないのに高尚がるのが彼女の癖なんだ。そして生じいなまの藤井の叔父の感化を受けてるのが毒になるんだ」〉

という会話で、紙屑よりも悪く引き裂かれ抛り出されている。と共に、こうした二人の描写に於いて、二人の「我」の深さ、「我」的姿勢に生きる軽薄さが一段と読者に向かって露呈される。しかし、そうした文学的実現のめでたさの中にお秀の論告は折りこまれながら、二人の生が、その我的姿勢への閉鎖の故に欠落させている次元はどんな次元であるかということの思い当てを、はっきりと読者に残していく。

津田とお延の生の欠落相が、お秀の口を通して、「人間らしく嬉しがる能力を天から奪われたと同様に見える」と、「天」とかかわって呈示されていることは、読者に或る思い当りを喚ばないだろうか。お延はすでに前に、津田の友人小林から同一趣意のことを、やはり「天」とかかわらせる如き形で言われている。

夫の古外套を貰いに来た小林が、あれこれ厭がらせ的な当てこすりをするのに耐えかねたお延は、小林を詰問する。

「じゃあなたは私を厭がらせる為に、わざわざ此所へ入らしったと言明なさるんですか」

「いや左右じゃありません。目的は外套を貰いに来たんです」

「じゃ外套を貰いに来た序に私を厭がらせようと仰しゃるんですか」

「いや左右でもありません。僕は是で天然自然の積りなんですからね、奥さんよりも余程技巧は少ないと思ってるんです」

― 中　略 ―

「怒っちゃ不可せん」と小林が云った。「僕は自分の小さな料簡から敵打をしてるんじゃないという意味を奥さんに説明して上げた丈です。天がこんな人間になって他に厭がらせて遣れと僕に命ずるんだから仕方がないと解釈して頂きたいのでわざわざそう云ったのです。僕は僕自身に悪い目的はちっともない事を、あなたに承認して頂きたいのです。然し天には目的があるかも知れません。そうしてその目的が僕を動かしているのかも知れません。それに動かされることが又僕の本望かも知れません」

ここにも、お秀の論告と同じく、お延の生の欠損状況への指摘が、あの場合ほどあらわでないが「天」が持ち出されつつ正しくなされている。

その一つは、お延の「技巧」の指摘である。結婚生活におけるお延の津田への姿勢は、「もし夫が自分の思う通り自分を愛さないならば腕の力で自由にして見せるという堅い決心」を軸としている。そしてその「腕の力」とは、「知恵と徳とを同じように考えているお延」と作者から評される「知恵」である。その知恵によってお延は、「自分の思うように夫を綾なして行」こうとする。津田は、「腕の力」的な「知恵」に、「残念だとは思いながら、力及ばず組み敷かれるたびに降参するのであった」。その不満さの中で、清子に対する「何うして彼の女は彼所へ嫁に行ったのだろう。……何うしても彼所へ嫁に行く筈はなかったのに」という未練がくすぶり続ける。津田の過去を知り、津田夫婦のそうした現況を察知している小林は、責任の一半は津田にあるが、他の一半はお延が負うべきであることを察知して来ている。お延との対話の座で「空惚ける事が上手」「そういう旨い手際を有っている」お延を直接目にした時、その察知は確信となった筈だ。小林がお延の「技巧」を言った時、その「技巧」という言葉にはこれだけの内容が詰められている。「知恵と徳とを同じように考えている」お延への、「徳」的次元の欠如の指摘でもある。〝夫ー婦〟において、まさしくお秀の言った「人間らしく嬉しがる能力を天から奪われたも同様な」状況の指摘でもある。

その指摘は、今一つの指摘と絡んでいる。先に引いた小林とお延の対話は次のように屈折的に発展していく。

＜「第一此私があなたに対して何んな悪い事をした覚えがあるでしょう。まあそれから伺いますから、云って御覧なさい」

「奥さん、僕は世の中から無籍もの扱いにされている人間ですよ」

「それが私や津田に何の関係があるんです」

小林は待っていたと云わぬばかりに笑い出した。＞

小林からは、お延が「何の関係もない」と言う、その関係において、両者の関係は「あり過ぎる位ある」。小林を「無籍者扱い」にして、しかも「何んな悪い事をした覚えがあるでしょう」とまで、小林と、恵まれた生活を保ち得る自分達の間に、人間としてのつながりを全く断ち切っているのは、当のお延でもある。お延は、「誰からも愛されたい、又誰からでも愛されるように仕向けて行きたい、ことに夫に対しては是非とも左右しなければならない、というのが彼女の腹であった。そうしてそれは例外なく世界中の誰にでも当て篏って毫も悖らないものだと、彼女は最初から信じ切っていた」という閉鎖の中におり、余裕ある生活者階層の思い上りの姿勢において、窮乏者小林を「僕には親も友達もないんです。もっと広く言えば人間がないんです」という断絶の中に突き放っている。小林に対する階層的我姿勢と言っていいだろう。お秀が津田とお延に言った「御自分達さえ可ければ、いくら他が困ろうが迷惑しようが丸で余所を向いて取り合わずにいられる」閉鎖である。「親切」が欠落していたように、お延には、そして勿論津田もであるが、ここでは

〝同情〟が欠落している。（作者は小林をして、やがて、津田にそのことを強烈に指摘させてみせている。）

小林から言わせれば、かれらへの関係は、さらにその下に今一つの層がある。小林は津田には語っている。「彼等（注　土方や人足）は君や探偵よりいくら人間らしい崇高な生地をうぶの儘有っているか解らないぜ。ただ人間らしい美しさが貧苦という塵埃で汚れているだけなんだ。つまり湯に入れないから穢ないんだ。馬鹿にするな」。そして小林にとっては、下等社会には「上流社会のように高慢ちきな人間は一人も居やしない」。小林にとってお延も又高慢ちき的な一人であろう。事実、お延は先に引いた会話の先で、小林さんから「奥さん、人間はいくら変な着物を着て人から笑われても、生きている方が可いものなんですよ」と、切実な自嘲を秘めた言葉を聞いても、「私はまた生きて笑われる位なら、一層死んでしまった方が好いと思います」と、その虚栄的な姿勢を露呈させている。高慢ちきな姿勢で下層社会に人間的蔑視しか浴びせず、しかも内部においては、「人間らしい崇高な生地」を腐食させて、相互に我的姿勢で拮抗し合っている「上流社会」に対して、尾を振る姿勢でなく、お延の考える「其分を弁え」「身分には段等があるものと心得えて」「己れに許された範囲内に於てのみ行動を敢えて」する服従の姿でもなく人間として認めてもらいたいという願いを内に屈折させたまま接触する時、小林には厭がらせ姿勢しかないのである。これが小林の論理である。厭がらせしか受けられぬ態勢を彼らは自身で内外に二重に造りあげている。「人間がいない」という小林の切実な嘆声を、お延が人間的に受けとめることが出来ず、まして、小林が、唯一人の妹を残して朝鮮落ちする悲しみを語っても、一片の同情心をも起さず、かえって、持ち前の「知恵」で話題を津田の事に引きもどした時、お延は、厭がらせを浴びるべき事態を自ら作ったのである。しかも、夫の津田に対して、お延は厭がらせをされて然るべき歪んだ姿勢しか持ち続けて来ていない。小林からすれば、単なるひやかしに始まった会話が、お延自身の手によって、鋭い厭がらせに転じていったのである。小林自身の意図的な〝厭がらせの尖鋭化〟ではない。お延の技巧と対比的に「僕は天然自然」と作者が小林に言わせている所以でもある。

今一つの場面がある。

叔父の家へ訪れたお延は、「女は一目見て男を見抜かねば不可ない」という主義を津田との結婚生活で見事に結実させてみせている者との信頼によって、従妹の見合いの相手の「眼利」を求められる。

〈お延は、辛いよりも寧ろ快よくなかった。それは、皆んなが寄ってたかって、今迄糊塗して来た自分の弱点を、早く自白しろと間接に責めるように思えたからである。此方の「我」以上に相手が意地の悪い事をするように見えたからである。

「自分の過失に対しては、自分が苦しみさえすれば夫で沢山だ」

彼女の腹の中には、平生から貯蔵してある斯ういう弁解があった。けれどもそれは何事も知らない叔父や叔母や継子に向って叩き付けるとすれば、彼等三人を無心に使嗾して自分に当擦りを遣らせる天に向ってするより外に仕方がなかった。〉

三人がお延に当擦りをする状況は、先の小林の言葉ふうに引き直せば「天然自然に当て擦る結果となった」と表現することが出来るだろう。作者は今それを、天の無心な使嗾と言っている。天が人間の生活に於ける事象にかかわってくるなら、それは作者漱石にとっては、「無心に」に於いてである。それ故、又それは、事態の自然的展開の相においてで

もある。小林がお延に「天がこんな人間になって他に厭がらせてやれと僕に命ずるんだから仕方がないと解釈して頂きたいのです」「天には目的があるか知れません。そうして其目的が僕を動かしているかも知れません」と言った事を、作者は又、「だから僕は天然自然だと言うのです。天然自然の結果、奥さんが僕を厭がられるようになるという文なのです」と、小林に言わせている所以でもある。

叔父たち三人がお延に、天然自然当て擦る結果となった事態が、作者にとって、天が無心に使嗾して当擦りを遣らせていると把握されるのならば、お延に対する小林の厭がらせも、無心に天が使嗾しているとの把握が作者にはあることを想定してよいのではなかろうか。勿論、叔父達三人にはお延への加害意識はない。小林の厭がらせは加害意識でもある。しかし、前に見たように、小林の厭がらせ姿勢は、お延たちがその中に彼を押し込めたものである。小林は、お延たちとの接触においては、厭がらせ姿勢という非人格的な姿勢を取るほか仕方なくされている被害者でもある。まして、小林の、お延への厭がらせを、深く転化させたのは、前に見たようにお延自身であった。それは、叔父たちに対するお延の姿勢が、事態を、「此方の我以上に相手が意地の悪い事をするように見えた」というのと同一の構造式のものである。

小林をしてお延に「天には目的があるか知れません」と作者が言わせた時、作者は読者に、お延の生の欠落状況との対比において、「天」にかかわるような一つの生の次元のことを言ったのである。それは又、小林が津田に誠実さをもって「君が夫らしくするかしないかが問題なんだ」と言った言葉に引き直せば、「あなたが人間らしくあるかどうかが問題なんです」という、小林のお延に対する言葉でもあり得る。

四、則天去私と『明暗』

『明暗』の中で、「則天去私」の「天」的な意味に解してよいと思われる「天」の用語例を含む個所は以上の三つである。そして、その三つの「天」が漸層的に強いテンションを持たされて出てくることも注意されていい。『明暗』に出て来る順は、本稿に出て来た順と逆である。そして、『明暗』に出て来る順に、作者は、「天」を、あからさまに持ち出さない手つきを深くしつつ、出している。すなわち、最初は、地の文自体に「無心に……天」と。次に小林の言の中の「天」。第三番目にお秀の言の中の「天から奪われたと同然に見えるのです」。

『明暗』における、これらの「天」の立ちあらわれ（それは「天」として露呈されているものでは、ほとんどなかったが、もともとそういうものとして「天」を作者漱石が考えていることは、第一例の「無心なる天」という示し方に端的に示されている）が、お延の、あるいは時に、お延と津田の、人間的欠落が問題とされている個所でのことであることは、何を意味するか。

漱石は『明暗』世界構成において、「自然」を一つの軸として設定した。（それは単に人間を「我」においてとらえるというだけでなく、もっと広く、言わば「自然」的人間としてとらえる事であった。そこには生活の長い連続線の果てに現象してくる〝風化〟の問題さえとりこまれていた。それは小さい取り上げであったが、それをお延にかゝわらせれば、お延の結婚生活での姿は、結婚生活を風化であらすまいとする若々しい感動的な姿でもある。その意味では重要な意味を持たされていると言うべきだろう。そして、その事は又、人間を「我」という型だけでとらえようとはしていない作者の姿勢を示していることでもあるが）

自然を軸とする次元での生状況を津田やお延に描きつつ作者は、彼らの人間的欠落として同情・親切・好意等の欠落を陰に陽に指摘している。それは、同情・親切・好意等が人間をつなぐ次元を逆立的に『明暗』世界に投射していると言うべきではないか。実は、小林が津田から餞別として貰った金を、より貧窮している友人原に其の場で贈ろうとすることを、その原青年の「土の牢の中に苦しんでいる僕には日光がないばかりか、もう手も足もないような気がします」という状況を手紙の文面としてではあるが読みきかされても一片の同情心を起こすだけで終わってしまう津田と対比させることによって、作者は、やがて、明確に彼等に欠落している次元を指摘して見せるのであるがその同情・親切・好意等の次元にもし軸を考えるなら、「天」をそれだと言い得る。それを許すような様相で「天」の語は、以上論考したように『明暗』の中に持ちこまれている。ただ、この場合、「軸」という喩は、ある意味では不都合なようである。しかし、それは、漱石の考える「天」、又「天」と同情・親切・好意との関係を論ずる際のことである。今は紙面に余裕がない。ただ、お延の「智」を言う時、作者が「知恵と徳とを同じように考えているお延」と言って、お延の欠落を「徳」の姿で考えていたこと、同情・親切・好意等が極めて人間的な徳であること、そして『道草』において、その己れにおける欠如を深刻に漱石が健三に自覚させ嘆じさせていたことを言っておきたい。

「天」が『明暗』中、右のように持ち出されていることを、冒頭に述べた「私」の語の持ち出しと並べて置いて見、漱石の文学への姿勢、『明暗』時の、道に志している漱石、修善寺大患以後の〝救われ〟の祈念等をそれにからませる時、私は、『明暗』世界を構築する漱石は、則天去私の語がその指標として言われたような、人生、人間への或る想念を内に持ち、作中人物、特に津田とお延の人間的欠落をその想念にかかわらせて構想していったと考える。

こう考える時、『明暗』は、若き世代に人生を教示するという傾きを少しばかり持つ。それについては他日述べたい。実は、そのことが逆に、『明暗』の文学的実現のめでたさを将来している一因とも考えられるから。

（終）